

コラム

みやちゃんと ご一緒体験記

Vol.36

【自分らしく生きられる社会に関する考察】

コロナ禍になって3度目の春がめぐってきました。4度目の春がこないように、【新しい日常を生きる】シリーズを終了したいと思います。

さて、今年の米アカデミー賞作品賞に輝いた作品は、ヤングケアラーの少女が主人公の「コーダ あいのうた」です。「ヤングケアラー」……最近、やたらこの言葉をきく機会が増えたような気がしませんか？ ひと昔前に「AC（アダルトチルドレン）」という言葉が出現した時のように。。

「ヤングケアラー」とは、本来、大人が行うような家族の世話や介護を担っている18歳未満の子どもたちのことをいいます。言うまでもなく悪いことをしているわけではありませんが、ヤングケアラー的生活をしているために、本来、子どもの権利である学びや遊びなどの時間がない状態は「子どもの権利侵害」にあたります。それゆえに社会全体で見守り支援することが必要です。家庭で虐待を受けているケースと同じように。

ところが、虐待をうけているわけではない場合、心やさしい子どもの多くが、大事な家族のために自分の時間を使っているのだから、「自分はヤングケアラーではない」と答える子どもが多くいるのが実情のようです。

「ヤングケアラー」に該当しなくても、共働きや片親家庭の子どもも多くは、炊事や洗濯を担当しているケースが多く、該当する子どもたちは塾通い、部活、友達と過ごす時間を持つことは多くありません。

昔は大家族がほとんどで、先に生まれた子どもが年齢差のある弟や妹たちの面倒をみるのがフツウのことでした。それによって家族の絆や団結力といったものが育まれていたのは確かです。ところが、（よく聞く話ですが）遺産相続などの場になると、「自分は家族（故人）のために自分の大切な時間を犠牲にしてきた」とか「病気がかりする故人のために、食べたいものも我慢しなければならなかった」といった主張をする人もいと聞きます。ちょっと情けなくあさましく感じるのは私だけでしょうか……。

現在は昔と違って一人っ子家庭が多いため、こういう問題はあまりでてこないかと思いますが、結局のところ、家族の在り方問題にいきつくように思います。

日本を含める先進国の子どもたちには権利はありますが、後進国の子どもたちの多くは幼いながらも“働き手”となって家族を支えています。彼らには権利とは名ばかり、子どもらしく生きる時間も平等という概念もありません。

世界中の誰もが平等に、自分らしく生きられる社会になるように、できることをしたいですね。

子ども関連ですっと気になっているのは、性教育を義務教育でしっかり教えるべきだということです。私は学校で性教育をうけた記憶はなく、当時、ませて博学の女子が近くにいたので、その女子に妊娠の仕組みについて教えてもらったことを覚えています。それでも概略だけで、きちんと理解したとはいえませんでした。

性の知識がないばかりにたった一つしかない身体にリスクを負うのは、たいていの場合、女子の方です。「女の子のからだえほん」（マティルド・ボディ/作・絵、ティフェヌ・ディユームガール/作、長香織/監修、河野彩/訳、パイインターナショナル/発売、本体1700円）は、女子が自身の身体と尊厳を守るための事柄がわかりやすく、まるで目の前で指導するかのように描かれている絵本です。知識がないために自分の身体のことを心配だがわからない、親は忙しいので教えてくれない、学校の先生にいうのは恥ずかしい、という人に「家庭の医学」同様近くにおいておきたい一冊です。

みやちゃんは緊急避妊薬の普及をずっと前から声高に叫んでおりますが、色々な障壁がありうまくいきません。自分の身は自分で守るしかありません。正しい知識を身につけましょう！

*****宮原富士子ブログ（4/30）*****

【緊急避妊薬の議論で感じるジェンダーギャップというか女性軽視の日本】

こんなに一生懸命意見いっても、取り組みで成功するかもしれない方法を提示しても、権力を提示されるような議論が公然とおこなわれるのは、哀しいことです。ハラスメントのありていは、受けたものの感情や尊厳に対する事象であるのであれば、今回のような扱いが、緊急避妊薬を希望して薬局を訪れる女性にとってセカンドレイプになりかねない恐怖感を想起しました。日本という国では、本当に女性が尊厳を大切にされながら 傷つかず生きていくには程遠い難しい遅れた国なんだなあをつくづく感じます。

この議論に限らず、涙を流している女性は、いろんな場面でたくさんいるんだろうなと 自分たちが活動できている間に少しでも何とかしたいものだと本当に思う朝です。
